



Title	第二言語習得における学習困難度の言語類型論的研究について：有標性の概念の問題点と格の学習困難度への拡張
Author(s)	村山, 友里枝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 20, 55-71
Issue Date	2015-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/59352">http://hdl.handle.net/2115/59352</a>
Type	bulletin (article)
File Information	04.Murayama.pdf



[Instructions for use](#)

## 第二言語習得における 学習困難度の言語類型論的 研究について

—有標性の概念の問題点と格の学習  
困難度への拡張—

国際広報メディア専攻 博士課程2年

村山 友里枝

村山  
友里枝

MURAYAMA Yurie

On the Typological Approach to Learning Difficulty  
in Second Language Acquisition:  
Some Problems with “Markedness” and Its Application  
to Learning Difficulty of Grammatical Case

MURAYAMA Yurie

abstract

The purpose of this paper is to review the typological approach to learning difficulty in second language acquisition and to consider its possible application to the learning difficulty found in the acquisition of cases in Korean and Japanese. I will first briefly show how the typological approach to learning difficulty has developed in second language acquisition research by incorporating the notion of markedness. Then, I will critically review the discussion on the controversial nature of “markedness,” which plays a central role in this approach. Finally, adopting an integrated notion of markedness, I will show in a preliminary way how this approach can be applied to the study of learning difficulty in the acquisition of grammatical cases in Korean and Japanese.

## 1 はじめに

第二言語習得において、ある項目は学習が易しく、またある項目は学習が難しいという学習困難度の違いに関する研究は、母語 (Native Language、以下NL) と目標言語 (Target Language、以下TL) との違いを重要視したLadoらの対照分析仮説に遡るが、現在の研究の実質的な基盤となる研究はEckman (1977) の有標性差異仮説 (Markedness Differential Hypothesis、以下MDH) である。Eckman (1977) は、言語類型論的な「有標性 (markedness)」という概念を用いて学習困難度を予測できると主張した。そしてMDHは、主に音韻論を中心にして影響力のある仮説として発展した。

本稿では、第二言語習得研究における学習困難度への類型論的アプローチの発展を概観し、特に有標性の概念がどのように導入され、発展してきたのか史の変遷を辿る。そして、このアプローチに内在する概念的な問題点を指摘し、さらにこの理論的な枠組みを用いて日本語と韓国語の格の学習困難度の研究をする際の問題点について予備的な考察を行うことを目的とする。

本稿の構成は次の通りである。まず、第2節では、第二言語習得研究における学習困難度への類型論的アプローチの発展を概観する。次に、第3節では、このアプローチの中心的概念である有標性の概念に関わる問題点についてHaspelmath (2006) を中心にして論じる。第4節では、類型論的有標性の概念を用いたアプローチを日本語母語話者による韓国語の格の習得、及び韓国語母語話者による日本語の格の習得の学習困難度の研究に応用する際の予備的な考察を行う。最後に、第5節はまとめである。

## 2 第二言語習得における学習困難度の研究の史の変遷

まず、第二言語習得における学習困難度の違いはどのように研究されてきたのかを3つの時代 (対照分析仮説、有標性を用いた初期の研究 (有標性差異仮説)、中間言語の概念と有標性差異仮説の発展) に分けて概観する。そして、それぞれの時代にどのような概念に基づいて研究が行われたのかその特徴を述べる。特に、学習困難度を説明する重要な概念である「有標性」がどのように導入され、発展してきたのかその史の変遷を辿る。

### 2.1 対照分析仮説の時代

1節で述べたように現在の研究に繋がる学習困難度の研究は、Lado (1957) に代表される対照分析に始まる。Eckman (2013: 409) によると、その最も明確な発言の一つでよく引用されるのは、Lado (1957:2) の次の箇所である。

(1) 我々は、外国語に接する学習者が、ある特徴は非常に簡単で、その他の特徴はきわめて難しいと気づくと考えている。学習者の母語と似ている要素は学習者にとって単純で、母語と異なっている要素は難しいだろう。

(Lado 1957 : 2)

(1) が示しているように、この時期には、NLとTLを比較し、その違いが第二言語の学習を困難にするという仮説に基づいて研究が行われていた。Wardhaugh (1970 : 123) は、この仮説を対照分析仮説 (Contrastive Analysis Hypothesis、以下CAH) と名づけた<sup>1</sup>。

しかし、1970年代になると、CAHの予測やLadoの主張は疑問視されるようになる。なぜなら、CAHの予測に反して、言語間の相違点のうち、必ずしも重大な学習困難点とはならないものがあることや、NLの影響によるとは思われない誤りがあることが実証的な研究で明らかになったためである (Odlin 1989 : 17)。

また、CAHへの批判は、誤用分析からもなされた。異なる言語背景を持つ学習者が生み出す誤りに類似性があることが示されただけではなく、第一言語 (L1) と第二言語 (L2) の習得過程における誤りにも類似性があることが示され、その結果、L1とL2の習得のプロセスは実際どのように異なっているのかという疑問が抱かれるようになった (Odlin 1989 : 19)。そして、「習得に普遍的過程は存在するか」という疑問を投げかけ、「発達上の誤り (developmental errors)」や「発達の順序 (developmental sequence)」の研究が行われるようになった (Odlin 1989 : 19-20)。さらに、このような疑問は、学習者が独自のL2の文法を作り出すという中間言語 (interlanguage) 研究へと繋がる (2.3節で後述)。

また、Eckman (1977 : 318) は、CAHのみでは、どちらの母語話者にとってより学習が困難であるかという「学習困難度の方向性を予測することが出来ない」という問題点を指摘した。Eckman (1977 : 317-318) は、Moulton (1962) に基づいてドイツ語と英語の語末の子音の学習の難しさは、英語母語話者とドイツ語母語話者で異なるという例を挙げている。英語では、語頭、語中、語末で有声と無声の阻害音が生じるが、ドイツ語では、有声と無声の阻害音は語頭と語中のみが生じる。ドイツ語は、語末では無声の阻害音のみを持つ。従って、ドイツ語では、語末の子音において有声と無声の交替がある。CAHが予測するようにNLとTLが異なっている領域の学習が難しいのであれば、英語とドイツ語で語末の子音の有声と無声の対立に関してそれぞれ異なっているため、英語母語話者とドイツ語母語話者の両方にとって語末の子音の学習が難しいことが予測される。しかし、実際には、ドイツ語母語話者にとって英語の語末で有声の阻害音を発音するのは非常に難しく、英語話者にとってはドイツ語の語末で有声と無声の交替をすることを学ぶのは難しいことがわかっている (Moulton 1962 : 49-50)。Eckman (1977) は、この現象を説明するにはCAHでは不十分であると指摘している<sup>2</sup>。

このようにCAHの予測力に限界があることが実証的な研究によって示され

▶1 さらにWardhaughはCAHを強い形式と弱い形式の2つのバージョンにわけた。L1とL2の比較によって難しさを予測可能とする強い形式と、難しさの予測は可能だが必要ではないという弱い形式である。Wardhaughは、強い形式は非現実的で実用的ではないと判断しているが、弱い形式は有益であると述べている (Odlin 2013 : 129)。

▶2 Eckman (1977 : 318) は、これだけでは、CAHの支持者は新しい対立あるいは新しい対立の場所を学習するのが難しく、対立を抑制するのを学習するのは難しくないという主張をする補助仮説を必要とすることが考えられるが、この拡張した仮説は、フランス語と英語の/l/という音素の学習では、間違った予測をしてしまうと説明している。

たため、CAHに代わる学習困難度の説明が求められるようになった<sup>3</sup>。

## 2.2 有標性を用いた初期の研究（有標性差異仮説）

このような対照分析の経験的な問題が明らかになると、CAHの予測の不十分な点を解決するために「有標性 (markedness)」の概念を用いて学習困難度を予測する試みがなされるようになった。その最初の研究で、代表的な研究はEckman (1977) である。

Eckman (1977 : 320) は、「第二言語の学習において難しい領域を予測するためにNLとTLを比較することは有効」だが、2.1節で述べたような理由でそれだけでは十分ではないと述べ、どの個別言語からも独立していなければならない（すなわち、普遍的な）「相対的な難しさの度合い (relative degree of difficulty)」という概念を取り入れる必要があると主張した。さらに、「難しさの度合いは、類型論的に有標であるという概念と対応している」と主張し、類型論的な有標性という概念をCAHに取り入れた。

まず、Eckman (1977 : 320) は、有標性を (2) のように類型論的に定義している<sup>4</sup>。

- (2) ある言語における現象Aの存在がBの存在を含意するが<sup>5</sup>、Bの存在がAの存在を含意しないなら、現象AはBよりもより有標である。

(Eckman 1977 : 320)

Eckman (1977 : 320-321) は、(2) の有標性の定義の具体例として次のような音韻論の例を挙げて説明している<sup>5</sup>。無声の障害音の音素のみを持つ言語と、有声と無声の障害音の音素を持つ言語がある。しかし、有声の障害音の音素だけの言語はないので、有声の障害音の音素の存在は、無声の障害音の音素の存在を含意するが、無声の障害音の音素の存在は、有声の障害音の音素の存在を含意しない。それゆえ、(2) の定義に従うと、「有声の障害音の音素は、無声の障害音の音素よりもより有標である」ということになるとEckmanは述べている。

そして、このような類型論的な有標性の概念に基づいて、Eckmanは (3) の「有標性差異仮説 (Markedness Differential Hypothesis, MDH)」を提案した。

- (3) 有標性差異仮説 (Markedness Differential Hypothesis, MDH)

言語の学習者が直面する困難な領域は、NLとTLの文法の体系的な比較と普遍的な文法の中で述べられている有標性の関係に基づき、次のように予測される<sup>6</sup>。

- (a) NLと異なっており、NLよりも有標なTLの領域は難しい。  
 (b) NLより有標なTLの領域の相対的な難しさの度合いは、相対的な有標性の度合いと対応する。  
 (c) NLと異なっているが<sup>3</sup>、NLよりも有標ではないTLの領域は、難し

▶3 CAHを批判し、それを認知的な側面から発展させた研究にはKellerman (1979, 1983) がある。Kellermanは、言語転移を左右する要因として、L1の典型度の認識や、L1とL2の間の距離の学習者の認識 (“psychotypology” (心理類型論)) を挙げている。KellermanはEckmanとは別の方向にCAHを発展させた。

▶4 Eckman (2013 : 410) によると、MDHにおける類型論的有標性の定義は、後にGundel, Houlihan and Sanders (1986) の「もし構造Xを持つ全ての言語は他の構造Yを持つが、Yを持つ全ての言語が必ずしもXを持つとは限らないなら、ある言語におけるXは、Yよりも類型論的に有標である (YはXと比べて類型論的に無標である)」というより一般的な定義になり、それがMDHに取り込まれた。これは、有標性の構成概念が発展してきたことと、MDHが提案されてから次の10年間で多くの学派で有標性が説明に採用されるようになった結果であるとEckman (2013 : 410) は述べている。

▶5 Eckman (1977 : 321) は、音韻論の例の他に、統語論の例として「行為者が表されていない受動文」と「行為者が表されている受動文」の例も取り上げて説明している。

▶6 榮谷 (1997 : 48) は、Eckman (1977 : 321) のMDHの説明に「universal grammar」とあるが、それはいわゆる普遍文法ではなく、「普遍的法則」という意味であることは承知しておかねばならないと述べている。



くない。

(Eckman 1977 : 321)

つまり、MDHは、学習者にとって困難な領域を予測するだけでなく、その相対的な学習困難度も有標性の関係によって予測する。有標性の概念を用いることによって、CAHでは正しく説明することができなかった学習困難度の特質をMDHではより正確に説明することができるようになったのである<sup>7</sup>。

## 2.3 中間言語の概念と有標性差異仮説の発展

2.2節では、Eckman (1977) の提案したMDHは、CAHの予測の不十分な点を補うために類型論的有標性を用いて改訂した仮説であり、NLとTLの違いのみが学習を困難にするのではなく、NLとTLの違いに加えて類型論的有標性が学習困難度を左右するという仮説であることを説明した。

ここでは、MDHがEckman (1977) 以降どのように発展してきたのかを概観する前に、MDHの発展に重要な影響を与えた「学習者の言語」という概念について説明し、それによってどのように仮説が変化したのかを概観する。

Selinker (1972) は、第二言語の学習者が学習の過程で生み出すNLでもTLでもない学習者の言語体系を「中間言語 (interlanguage)」という用語で示した<sup>8</sup>。Selinker (1972 : 212-214) は、大多数の第二言語の学習者は母語話者の能力に達することができないので、そのような学習者の発話において観察されるTLの発話と、TLの母語話者によって産出された発話は同一のものではないと述べている。それゆえ、学習者のTLの観察可能なアウトプットに基づいて独立の言語体系の存在を仮定し、それを「中間言語」と呼んだ。

この中間言語の概念は、第二言語習得の研究に大きな影響を与えた。そして、40年以上経った今でも中間言語の研究はさかんに行われている。Han and Tarone (2014 : 1) は、第二言語習得の領域の研究において繰り返し読まれる研究はわずかしかないが、「Selinker (1972) の中間言語は明らかな例外」であり、第二言語習得研究に活気を与え続けていると述べている。

「有標性」を用いた第二言語習得研究も、中間言語の概念が取り入れられ、それに伴って発展した。Eckman (2011 : 627-628) によると、学習者が産出する中間言語の文法は、NLの転移でもTLのインプットの影響によるのではなく、NLでもTLでもない世界の他の言語の中にあると実証されているパターンに結果としてなるということが注目されるようになった。そして、このような中間言語のパターンは、有標性の原理に従っていたが、MDHの仮説で前提となっていたNLとTLの間に違いがある領域ではなかった。この発見は、「NLとTLの違いは必要ではないだろうという主張を支持するもの」であり、MDHを改訂するきっかけになった。

このような観察に基づいて、Eckman (1977) のMDHは、Eckman (1991) の論文で、(4) の「構造的一致の仮説 (Structural Conformity Hypothesis, SCH)」に改訂された<sup>9</sup>。

(4) 構造的一致の仮説 (Structural Conformity Hypothesis, SCH)

▶7 上述のドイツ語と英語の語末の有声と無声の対立の学習困難度はCAHではうまく説明することができなかったが、MDHでは類型論的なVoice Contrast Hierarchyに基づいて正しく学習困難度を予測することをEckman (1977 : 321-323) は示している。

▶8 学習者の言語の理論的な構成概念は、異なる学者によって独立に提案され、「特異方言 (idiosyncratic dialect : Corder 1971)」、「近似体系 (approximative system : Nemser 1971)」、「中間言語 (interlanguage : Selinker 1972)」と名づけられたが、「中間言語」という語が現在まで続いている (Eckman 2011 : 626)。

▶9 Eckman (1991) では、Interlanguage Structural Conformity Hypothesis (Interlanguage SCH) と呼んでいたが、後にSCHと呼ばれるようになった。

母語に当てはまる普遍的な一般化は、中間言語にも当てはまる。

(Eckman 1991 : 24)

MDHは、NLとTLの間に違いがある領域で学習困難度を予測するものであったが、SCHはNLもL2のパターン（中間言語）も有標性の原理に従うことを予測し、MDHを「特殊なケース」としてみなしている（Eckman 2011 : 628）<sup>10</sup>。つまり、MDHは、NLとTLが異なっている領域の学習困難度を予測する仮説であり、NLとTLが異なっていない領域の学習が困難かどうかは何も予測していなかった。しかし、SCHはNLとTLの構造が同じであってもL2のパターンは有標性の原理に従うということを予測する。この仮説は、学習者はL1とL2のどちらにおいても、より有標の構造に比べてより無標の構造でよりよい成績をあげるだろうと主張するものである（Ellis 2008 : 387）。

Eckman（2011 : 628）は、「SCHを検証するのに報告されてきたデータは、統語論の領域にもいくつかはあるが、多くはL2の音韻論の領域である」と述べている。そして、SCHに関係する最も興味深い種類の証拠は、「NLの特徴もTLの特徴も持たないが、世界の言語のどれかの中に見つけられる普遍的なパターンの類に従っている中間言語のパターンである」と述べている。さらに、Eckman（2008、2011）は、SCHを支持する研究について音韻論を中心にいくつか概観している。次節では、SCHへの批判とそれに対するEckmanの反論を取り上げる。この過程で、類型論的有標性を用いた説明とはどのようなものであるかを説明する。

## 2.4 構造的一致の仮説（SCH）への批判と反論

2.3節では、中間言語の概念により、MDHはSCHに改訂され、その妥当性を示す研究があることを述べた。しかし、有標性やSCHの説明は十分ではないという批判もある。ここでは、SCHへの批判とそれに対するEckman（2004）の反論を取り上げる。

Eckman（2004 : 683）によると、類型論的な有標性を用いたアプローチに反対する立場は2つある<sup>11</sup>。1つは、類型論的一般化や有標性の原理は単に説明されるべき事実であって、それゆえ、有標性は説明に役立たないという立場である。もう1つは、説明を与えるというよりも「説明の問題をワンステップ後ろに押しやるだけ」という立場である。

Eckman（2004 : 683）はこのような問題に対して、「有標性に基づく説明の批判のどれもが説得力のあるものではないこと」、そして上記の2つの批判のどちらの立場も、「援用された法則の一般化と対応する説明のレベルがあるという科学的な説明に関する非常に重要な論点を見落としている」と指摘している。

Eckman（2004 : 685-686）は、Sanders（1974）の議論に基づいて、次のような一連の問いとそれに対する答えを示し、説明とは何か、特に「説明のレベル」とは何かについて論じている。

Q1 : 英語のold menという句のoldという語は、なぜmenに先行するのか？

▶10 2.2節で述べたようにEckman（1977）のMDHは、NLとTLの間に違いがない領域については言及されていない。Eckman（2011 : 628）は、そのようなパターンは、MDHの表現の中には述べられていないにしても、MDHのいわんとするところには入っている、しかしMDHによって説明されていないと述べている。

▶11 Eckman（2008 : 104）もSCH及び類型論的有標性を用いた研究への批判に対してEckman（2004）と同様の観点から論じている。

A1：なぜなら、oldは形容詞でmenは名詞であり、英語では形容詞が修飾する名詞に先行するからである。

Q2：なぜ英語では形容詞が修飾する名詞に先行するのか？

A2：なぜなら、英語では、句はX” →指定部X’、X’ →Xの補部というスキーマに従って構成されており、形容詞は名詞句の指定部だからである。

Q3：なぜ英語では指定部が主要部に先行するのか？

A3：なぜなら…。

Q4：なぜ…？

Eckmanによると、これは、説明として援用された一般化が次第により一般的になっているので、説明のレベルがますます高次になっているという点で「説明的上昇 (explanatory ascent)」を示している例である。そして、「より一般的な原理がないためA1を単なる記述として却下することは科学的に軽率である」と述べている。Eckmanはそうすることで全く説明ができなくなると論じている。

また、Eckman (2004 : 687) は「最良の研究プログラムは、さらに進んだ疑問を提起できるようにすることによって説明的上昇を可能にするもの」と述べている。そして、「説明的原理に役立つ法則や一般化は、より高次の一般化の下に包括することによってそれ自体が説明の目的となるだろう」と述べている。このような「説明のレベル」があるということを考慮に入れると、有標性は説明を与えているといえよう。

Eckmanは、有標性は説明されるべき事実であって、説明を与えるものではないという批判に対して、「説明のレベル」という重要な科学的な説明の特質を見落としていると指摘したが、その一方で、有標性の概念そのものを明確にはしていない。有標性の概念を用いて説明することに反対の立場の研究者とEckmanらの類型論的有標性を説明として採用する研究者とでは有標性の概念そのものの捉え方が異なっている可能性がある。その意味で、Eckman (2004) の反論は、十分ではない。そこで、次節では、「有標性」の概念的な検討を行う。

### 3 有標性の概念の検討

2節では、有標性の概念がCAHの説明の不十分さを補うものとして取り入れられ、Eckman (1977) のMDHの仮説及びそれを発展させたSCHは音韻論を中心に第二言語習得研究に貢献したということを見た。ここでは、2.3節で説明した問題に加えて、有標性の概念を用いた学習困難度の研究に関わるもう1つの問題点について論じる。

第二言語習得研究において有標性の概念を用いている研究は、その研究領域が限られている。Eckman (2011 : 620) や榮谷 (1997 : 62) が指摘してい



るように、MDHやSCHによってなされた主張を支持する研究の多くは、L2の音韻論の領域である。また、類型論的有標性を用いている第二言語習得研究の焦点は、統語論の領域では、主に関係節（残留代名詞の使用）のみであったということがEckman (2011) で概観されている<sup>12</sup>。Eckman (2011:622) は、関係節に焦点が当てられていた理由として、関係節は言語間で大きく異なること、そして普遍的な一般化の観点からこの変異が特徴付けられるという理由を述べている<sup>13</sup>。

有標性を説明として用いている第二言語習得研究の領域に偏りがあることは、MDHやSCHの仮説の経験的妥当性や適用可能性を考える上で問題となる。

Callies (2013:406-407) やEllis (2008:387) によると、第二言語習得研究において、有標性を用いた研究の領域が制限されていたのは、有標性に多様な意味と定義があるため、術語の曖昧性 (vagueness) と不確定性 (indeterminacy) が生じたことによる。それがこの概念を言語理論に取り入れる際に障害になった。すなわち、MDHやSCHの仮説を用いている研究領域の偏りは、CalliesやEllisが指摘しているように、有標性の意味や定義が多様であることが原因であると考えられる。

そこで、MDHやSCHの仮説をより広い研究領域に拡張するためには、有標性の多様な意味と定義を根本的に見直す必要がある。以下では、有標性の多様な意味と定義を見直すことによって、日本語と韓国語の格の学習困難度を説明するような他の研究領域にもMDHやSCHが適用可能になることを主張する。ここでは、類型論的有標性の概念に批判的な考察を行っている Haspelmath (2006) に基づいて、有標性の概念を再検討する。

### 3.1 「有標性」の多様な意味

Haspelmath (2006:27) は、「有標性」が様々な研究領域で採用された過程で2つのことが起こったと述べている。一つは、「有標性」という語が広く多様な異なった意味を持つものとして発展したことである。そしてもう一つは、「有標性」は特定の理論的なアプローチとの結びつきを欠き、言語学において理論に中立で日常的な言葉になったということである。

Haspelmathは、「有標性」は、言語学において多義の語であるということをも明確に指摘した上で、「有標/無標」の語を用いているほとんどの言語学者はそれらを1つの意味だけか様々な意味の部分集合になっている意味で用いている。そして、彼らは、その他の意味が存在していること、あるいはその意味の間の違いが非常に大きなものでありうるということに気が付いていないようである」と述べている (Haspelmath 2006:27)。それゆえ、「有標性」を説明原理として用いる際には、その概念的な意味の違いに留意し、定義を明確にしておく必要がある。

Haspelmath (2006) は、「有標性」という語は他の本質的な要因に置き換えられるべきであるという観点から、「有標」・「無標」の多義の意味を分類し、それらがどのような本質的な要因に置き換えることが出来るか検討している。Haspelmathは、様々な研究領域で用いられてきた「有標性」という語を12の

▶12 MDH、SCHの仮説を用いずに類型論的有標性を用いている第二言語習得研究もある。これについては、Eckman (2011) に詳細な説明がある。

▶13 ここでの普遍的な一般化とは、類型論的な有標性の概念に基づいた一般化である。Eckman (2011:621-622) は、類型論的な有標性の概念に基づいた一般化の例として、Keenan and Comrie (1977) の名詞句接近の階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy: NPAH) を取り上げている。

異なる意味に区別し、さらにそれらをより大きい4つの種類 (complexity, difficulty, abnormality, multidimensional correlation) に分類している。次の表はHaspelmath (2006: 26) に基づき、有標性の12の異なる意味とその例をまとめたものである。

▶14 表内の右側の具体例は、Haspelmath (2006: 26) の表に従ってまとめたが、例の全てについて特定の個別言語 (例えば英語、ドイツ語) に言及しているわけではない。したがって、ここで挙げられている具体例は、あくまで12の有標性の意味がどのようなものであるかを簡潔に示したものであり、全ての個別言語に普遍的に当てはまるものかどうかをここで検討しているわけではないということを書き記しておく。

▶15 類型論的含意に関して、Haspelmath (2006: 39) は、特に音韻論で役に立つ概念であると述べ、「もしある言語が放出閉鎖音(声門閉鎖を伴う閉鎖音)を持つなら、その言語は単純な閉鎖音を持つ」という例を挙げている。

▶16 「分布的な有標性」に関してHaspelmath (2006: 35-36) は、ドイツ語の従属節における動詞と目的語の語順の例を用いて論じている (4.2節で説明する)。しかし、この表の例がどの言語の現象なのかということに関しては明確に述べられていない。

■表1 「有標性」の12の意味とその典型的な使用 (Haspelmath 2006: 26)<sup>14</sup>

複雑なものとしての有標性 (markedness as complexity)	例
1. Trubetzkoyの有標性: 音韻論の区別の詳述としての有標性	ドイツ語では、音韻的な対立t:dは、音節の最後でtの方を選んで中立化される。dは対立のmark-bearingのメンバーであるということを示している。
2. 意味論的な有標性: 意味の区別としての有標性	英語のdog/bitchの対立において、dogは無標のメンバーである。なぜなら、dogは雄の犬あるいは一般的な犬を示すことができるからである。
3. 形式的な有標性: 顕在的なコード化としての有標性	英語では、過去時制は、(-edによって) 印付けられており、現在時制は印付けられていない。
難しさとしての有標性 (markedness as difficulty)	例
4. 音声の有標性: 音声の難しさとしての有標性	b>d>g>Gという段階で、右側の子音は、次第により有標である。
5. 形態的な難しさ/不自然さとしての有標性	book/booksのような単数/複数のペアはsheep/sheepよりもより無標である。なぜなら、後者は類像的ではないからである。
6. 認知的な有標性: 概念的な難しさとしての有標性	複数形のカテゴリーは無標である。なぜなら、それは単数形よりもより多くの心的な努力と処理の時間を要するからである。
異常性としての有標性 (markedness as abnormality)	例
7. テキストの有標性: テキストにおける珍しさとしての有標性	直接目的語に関して、主語と同一指示は無標で、独立の指示対象は無標である。
8. 状況的な有標性: 世界で珍しいものとしての有標性	有標の状況に関して、言語は、複雑な表現を典型的に用いる。
9. 類型論的有標性: 類型論的含意 <sup>15</sup> あるいは通言語的な珍しさとしての有標性	音節のcodaの位置はonsetの位置と比べて有標である。
10. 分布的な有標性: 制限された分布としての有標性	目的語—動詞の語順は無標のケースである: それは否定とともにしか起こらない <sup>16</sup> 。
11. デフォルトのパラメータの設定から逸脱したものとしての有標性	名詞編入がないのは無標の場合である。生産的な名詞編入の存在は、特定のメトリックな特性によって引き金とならなければならない。
12. 多次元的な相関としての有標性 (markedness as a multidimensional correlation)	単数形は複数形よりもより有標である。複数形は両数形よりもより有標である。

ここでは、紙面の都合上Haspelmath (2006) が分類した全ての「有標性」

の意味について取り上げ論じることがはしないが、どの「有標性」の概念に基づいて次節で述べる格の学習困難度を説明するのかを明確にしておく必要がある。以下では、表1の12.「多次元的な相関としての有標性 (markedness as a multidimensional correlation)」に注目して議論を行う。

### 3.2 多次元的な相関としての有標性

Haspelmath (2006) は、「有標性」の多様な意味を表1のように明確に区別し、分類したが、有標性の意味の「大部分は互いに論理的に独立したものであるが、それらはほとんど互いに矛盾しないもの」であり、「これら (いくつかあるいは全て) の意味の結合として定義されうる」と述べている (Haspelmath 2006 : 37-38)。すなわち、「有標性」の意味は、表1で示した1~11の意味に区別することができるが、「多次元的な相関としての有標性」は、表1の1~11の細分化されたいずれかの意味の1つを持つのではなく、複数の概念からなる意味を持つものである。それゆえ、「多次元的な相関としての有標性」は、他の11の意味とは性質が異なるものであるといえる。

Haspelmath (2006 : 38) の説明に従うと、例えば、複数形や未来時制のようないくつかのカテゴリーは、意味的に複雑で、顕在的にコード化されており、テキストに生じることが稀で、一部の言語にのみ見られる。また、その分布は制限されている。そして、これらのカテゴリーが持つすべての特徴は有標であると述べている。一方、その他のカテゴリー (単数形あるいは現在形) は、意味的に単純で、顕在的にコード化されておらず、テキストで頻繁に生じ、全てあるいはほとんどの言語で見られる。そしてその分布は制限されていない。そして、これらは無標の特徴であると述べている。このように、あるカテゴリーがどれか1つの意味で「有標」なのではなく、複数の意味の「有標性」を持っており、「異なる有標性の側面で同じ有標性の価値を表していることは注目すべき観察である」と述べている。さらに、これは、「論理的必然ではないので、重要な経験上の発見である」とHaspelmathは述べている。

このアプローチを取っている代表的な研究者としてHaspelmath (2006 : 38-39) は、GreenbergやCroftを挙げ、彼らが論じた特質を6つ指摘している。その6つとは、「テキストの頻度 (text frequency)」、「構造的なコード化 (structural coding)」、「屈折の差異化 (inflectional differentiation)」、「任意の表現 (facultative expression)」、「文脈上の中和 (contextual neutralization)」、「類型論的含意 (typological implication)」である。

Croft (2003 : 87) は、類型論的有標性の背後には非対称あるいは一様ではない文法的な特性があると述べ、そのような非対称なパターンは、「類像性 (iconicity)」と「経済性 (economy)」によって動機付けられていると述べている。「類像性」とは、「形式と意味の間に1対1の対応がある」(Croft 2003 : 103) ことを言い、一方「経済性」とは、「表現は可能なところで最小にされるべきである」という原理である (Croft 2003 : 102)。そして、有標性に対してなぜ経済性の動機付けがそこで見つけられるのかの説明を与えてくれるのは、カテゴリーの値の相対的なテキストの頻度あるいはトークンの頻度であると述べ、次のように定義している (Croft 2003 : 110)<sup>17</sup>。

▶17 トークンについてCroft (2003) は特に定義していないが、テキストに現れる1つ1つの単語という意味で用いていると思われる。

- (5) テキスト（トークン）の頻度：もし、あるカテゴリーの類型論的に有標な値のトークンが、あるテキストのサンプルで一定の頻度で生じるなら、無標の値のトークンは、そのテキストのサンプルで少なくとも同じ数だけ生じているだろう。

(Croft 2003 : 110)

さらに、Croft (2003 : 110) は、ふるまいの潜在性のようなテキストの頻度に関わる特質は、普遍的な適用可能性のあるものであると述べている。この「テキストの頻度」という概念は、かなり広い意味の「有標性」を説明できると思われる。Haspelmath (2006:40) は、頻度が他の全てを説明するので、多次元的な相関関係それ自体を説明する用語は必要ないと言っている。しかし、複数の意味で「有標」あるいは「無標」であるということを示すのに「頻度」という概念のみでは十分ではないように思われる。説明として用いる「有標性」の概念の意味を明確に区別した上で、「多次元的な相関としての有標性 (markedness as a multidimensional correlation)」という概念を用いる必要があると考える。

### 3.3 分布的な有標性

そして、もう一つ、文法的なカテゴリーや統語の「有標性」を論じる際に用いることができる定義として有益であると思われる概念に「分布的な有標性 (markedness as restricted distribution, 'distributional markedness')」がある。Croft (2003 : 98) は、この有標性の概念を「分布的な潜在性 (distributional potential)」と呼び、次のように定義している。

- (6) 分布的な潜在性：もし有標の値が一定数別個の文法的な環境（構文のタイプ）で生じるなら、無標の値も少なくとも有標の値が生じるのと同じだけの環境で生じる。

(Croft 2003 : 98)

Croft (2003 : 98-99) は、分布的な潜在性に関して、類型論的に有標の値の分布がそれと対応する無標の値の分布と比べて制限されているのは、意味的な対立があるためであると述べている。ここでは、Croft (2003 : 98-99) が説明として挙げた例に基づいて、分布的な潜在性の例を示す。

- (7a) She sings madrigals.  
 (7b) She is singing a madrigal.
- (8a) She has red hair.  
 (8b) \*She is having red hair.

(7a)、(7b) で示したように、英語では、プロセスの意味を持つ述部は、単純な現在形と現在進行形の両方で生じる。一方で、(8a)、(8b) のように状



態を表す述部は進行形では用いることはできない。Croftは、「状態を表す述部の限られた分布は、現在／現在進行形の対立の背後にある意味的な区別がプロセスを表す述部のみ関係している事実のためである」と説明している。

このような有標性は、意味的な特性によってその分布が決まっているといえる。そして、この「分布的な潜在性」は、次節で述べる格の有標性にも適用することができると考えられる（詳しくは4節で述べる）。このことは、「分布的な潜在性」が、音韻論、文法的なカテゴリー、語彙、統語のパターンという広い領域において説明可能であるというHaspelmath (2006: 35-36, 65)の指摘によっても裏づけられる。MDH、SCHを音韻論以外の領域に拡張するには、このような広い研究領域で適用されている「有標性」の意味と定義を採用することが必要であると考えられる。

本節では、学習困難度への類型論的なアプローチ、特にMDHやSCHが音韻論の領域に偏っていたこと、そして、「有標性」の概念に問題があることについて論じた。Eckman (1977) では、「有標性」を類型論的に定義していたが、Croftの定義を採用することによって、「有標性」の概念を拡大し、MDHやSCHをさらに発展させる可能性がある。これまで主に音韻論が中心で、関係節や残留代名詞など統語論の研究はあるにしても研究領域が偏っていたという問題があったMDH、SCHは、「有標性」の多様な意味と定義を見直すことでその他の研究領域にも応用することが可能になることを示唆した。

## 4 有標性を用いた格の学習困難度の分析のための予備的考察

有標性の概念を用いて、日本語と韓国語の格の学習困難度の予測をする際に必要なことは、まず、この2つの言語の対応する格の有標性を決めることである<sup>18</sup>。つまり、格の有標性を特徴づける基準が必要となる。3節で見たように、「有標性」はさまざまな領域で用いられたために、その意味が多義的である。本節では、3節で考察した有標性の概念に基づいて格の有標性をどのように特徴づけることができるか予備的な議論を行う。

### 4.1 格の有標性の階層

3節では、「有標性」の概念が多義的で、広く異なった研究領域で用いられていることを概観した。格に関しても有標性の階層があることが提案されている。Blake (2001) は (9) のような格の有標性の階層を提示している。

- (9) 主格>対格/能格>属格>与格>所格>奪格/具格>その他  
(Blake 2001: 156)

この階層は、階層の右側に位置している格を持つ言語は、普通それよりも左側にある全ての格（例えば与格を持つ言語は、属格及び対格あるいは能格、

▶18 格は、研究者によって異なる術語・定義が用いられる。Haspelmath (2009:508) は、「主語と目的語のような本質的な統語的な関係を表すより抽象的な格と、様々な特定の意味役割(特に空間の関係)を表すより具体的な格の間でしばしば区別がある」と述べている。そして、grammatical cases—semantic cases, relational cases—adverbial case, grammatical cases—concrete casesなどの術語が2つの分類を表すのに用いられていると述べている。本稿で扱う格は、形態的な格であり、意味的な格は考慮に入れていない。



あるいはその両方、そして主格)を持つ傾向があることを示唆している。

(9)の階層を支持する証拠として、Blake (2001: 156-160)は、様々な格のシステムを持つ言語を挙げ、格のシステムの拡張が格の階層に従っているという通言語的な証拠を提示している。なお、Blake (2001: 156)で提案された格の有標性の階層は、格が束縛代名詞や語順によって表されている場合は考慮に入れておらず、形態的な格に関するものである。

Blake (2001)の格の有標性の階層に対して、Malchukov and Spencer (2009: 652)は、いくつかの反例に見える観察について論じている。しかし、表面上は格の有標性の階層に従わない言語も、格のシステムが代わりの方法(一致、語順、前置詞/後置詞)によって表されているためと説明が可能であり、Blakeの格の階層は、特異なケースを除き、世界の言語に見られる傾向を表しており、一般的には多種多様な格のシステムに当てはまっていると述べている。

Blake (2001)の格の階層は、3節で見た「有標性」の多様な意味のうち、類型論的な含意に基づくものであり、Haspelmath (2006)の分類では「類型論的な有標性: 類型論的な含意あるいは通言語的な珍しさとしての有標性」に属するものと考えられる。

次節では、このBlakeの格の階層が用いている類型論的な有標性の概念では本研究が対象とする格の有標性を決定することができず、代わりに「多次元的な相関としての有標性」の概念が必要であることを論じる。

## 4.2 目的語を標示する日本語の与格「に」と韓国語の対格「을/를 (ul/lul)」の有標性

本研究では、とりわけ次のような直接目的語を標示する日本語の与格「に」に着目する。

(10) 馬に乗りました。

(10)に対応する韓国語の文では、対格「을/를 [ul/lul]」が用いられる<sup>19</sup>。韓国語には「に」と対応する用法の多い「에 [ey]」、「에게 [eykey]」という与格の標識があるが、(10)に対応する韓国語の文では、与格は用いられず、対格「을/를 [ul/lul]」が用いられる。

(11) 말을 탔어요. (直訳: 馬を乗りました。)

他にも日本語では対象を表すのに対格「を」の代わりに与格を取る動詞がある。朴 (1997)は、日本語では与格を取るが、韓国語では対格を取る動詞として、「会う」、「従う」、「気づく」など30の動詞を挙げている。しかし、これらの「に」は、全てが格助詞であるわけではなく、後置詞の「に」などである可能性がある。そこでまず、格標識の「に」とその他の「に」を明確に区別する必要がある。

日本語の「に」には、Sadakane & Koizumi (1995)によると、4つのタイプ

▶19 韓国語のローマ字表記については、Yale式を用いるSohn (1999: 2-4)。

(与格の格標識、後置詞、に挿入の「に」、コピュラ)がある。本研究では、日本語と韓国語の格標識の学習困難度を説明するため、格標識の「に」に限る。そのための手続きとして、Sadakane & Koizumi (1995) で用いていた数量詞遊離ができるかどうかを1つの基準とする。そして、格であるものに限り、日本語と韓国語の格の学習困難度の予測を行う。上記のケースは、日本語と韓国語で格の標示が異なっているケースなので、NLとTLの間に違いがあり、MDHに関わる。

Blakeの格の階層は、与格を持つ言語は対格も持つ傾向があることを示唆している。しかし、与格で目的語を標示できる言語は対格でも目的語を標示できるということは予測しない。なぜなら、この階層は、類型論的な有標性に基づいて、ある言語がどの格を持つかということしか示さないからである。それゆえ、Blake (2001) の格の階層では、目的語を標示する与格と対格のどちらが有標であるかを決定することは難しい。学習困難度の予測をするために必要なことは、直接目的語を標示する与格と対格の有標性を決めることである。格の有標性を特徴づけるための他の基準が必要となる。

そこで、本稿では、3節で述べたHaspelmath (2006) の「多次元的な相関の有標性」の概念を用いることを試みる。また、Croft (2003) の「分布的な潜在性」の記述も格の学習困難度に応用できる可能性があることを示す。

まず、「多次元的な相関の有標性」の概念に基づいて、格の有標性を特徴づけるには、すでに見たように頻度 ((text or token) frequency) で特徴づけることができる。有標性は頻度によっても動機付けられることがHaspelmath (2006)、Croft (2003)、Malchukov & Spencer (2009) によって主張されている。日本語の与格で目的語を標示する場合は対格で目的語を標示する場合よりも相対的に頻度が少ないということがわかれば、有標性が高いと特徴付けられる。

また、日本語の与格「に」が「～に乗る」のように目的語を標示する場合は、ある特定の条件のみに起こる現象でHaspelmath (2006) の分類でいうと「分布的な有標性」と考えることもできる。

Croft (2003: 97) は、ふるまいの潜在性に関して、分布的な潜在性は問題になっている言語の要素が生じる環境の数を決定付けることと関係しており、よりたくさんの統語的な環境あるいは構文において生じる要素は、より大きい分布的な潜在性を持っていると述べている。

また、Croft (2003: 98) は、分布的な潜在性における数を数えるという問題について「主要な難しさは、見つけられる1つの要素の文脈の数が他の要素が見つけられる文脈の数よりも多いということを言うために、分布的な文脈をどう数えるかを決定付けることである」と述べた上で、実際に「形態統語的な文脈を個別化し、数える独立した方法が必要とされる。しかし、(そのような方法は) 可能かもしれないがまだ存在していない」という問題を指摘している。

しかし、「文脈の1つのセットがもう一方の部分集合になっているなら、文脈の前者のセットは後者よりも数が少ないということはどれだけ文脈を数えようとも明らかである」と述べている。このことから、実際に日本語で目的

語を標示する対格と与格の頻度を数えることは難しいということがわかり、そして、その必要もないということがわかる。部分集合になっていることを示すことが一つの方法である。

部分集合の説明に関しては、3.3節で述べたように、意味的な特性がその分布を制限しているとCroftは説明している。このことから、日本語の与格で目的語を標示する動詞をリストアップし、その動詞の意味的な特性の共通点を見つけることで対格を取る動詞の部分集合になっていることを示すことが可能ではないかと考える。

また、Haspelmath (2006: 35-36) は、制限された分布に関して、2つの異なる状況を挙げている。1つは、「もしAがいつも生じうるが、Bのみが特定の条件下で現れうるなら、Bは有標でAは無標であると言われる」。そして、もう1つは、「Bが特定の状況下で現れ、Aがそれ以外で現れるときにも有標性の関係がつきとめられる」と述べている。そして、Haspelmath (2006: 35-36) は、従属節におけるドイツ語の目的語—動詞の語順の例を挙げている。動詞—目的語の語順は、目的語が比重の大きいときに現れる一方、目的語—動詞はいつも現れうるので、後者が無標であるという例である。

このHaspelmathの「分布的な有標性」を用いて日本語の与格で目的語を標示する場合と対格で目的語を標示する場合の条件を提示することによっても、与格で目的語を標示するケースは有標であると示すことが出来ると思われる。韓国語の目的語を標示する与格と対格についても同じ議論が当てはまると考える。

もし、この予測が正しいということを経験的に示すことができれば、このような有標性の関係に基づいて、MDHは日本語と韓国語の直接目的語を標示する格の学習困難度を次のように予測することができると考える<sup>20</sup>。

▶ 20 MDHはSCHの一部として含まれているので、SCHも同じ予測をする。日本語でも韓国語でも与格で目的語を標示する用法は、対格で目的語を標示する用法よりも有標なので、日本語母語話者が韓国語の対格で目的語を標示する用法を学習する際は、学習は易しいと予測できる。一方、韓国語母語話者が日本語の与格で目的語を標示する用法を学習するのは、より有標な用法のため、学習が難しいと予測される。

#### (12) MDHに基づく学習困難度の予測

目的語を対格で標示する韓国語の用法は、目的語を与格で標示する日本語の用法よりも無標なので、

- (a) 日本語母語話者にとって、韓国語で目的語を対格で標示するという日本語より無標の用法を学習するのは難しくない。
- (b) 韓国語母語話者にとって、日本語の目的語を与格で標示するという韓国語より有標の用法を学習するのは難しい。

## 5 | まとめ

本稿では、第二言語習得における学習困難度がどのような概念に基づいて研究されてきたかその史の変遷を辿った。そして、CAHに代わって「有標性」

の概念を用いた類型論的なアプローチ (MDH、SCH) が学習困難度をより正確に予測することができるようになったことを概観した。しかし、第二言語習得研究における類型論的なアプローチは、主に音韻論に偏っていた。この偏りは、「有標性」の概念が類型論的に定義されていることに関わる問題であるということを論じた。

そして、Haspelmath (2006) に基づいて「有標性」の概念を再検討し、明確にしたうえで、「多次元的な有標性」の概念を採用することで、MDHやSCHは学習困難度の対象を音韻論以外の領域にも拡張することができるということを論じた。さらに、日本語と韓国語の格の学習困難度に応用するための予備的考察を行った。

Eckman (2011: 632-633) は、類型論的有標性を用いた今後の研究の発展のために次の3つの領域を指摘している。1つ目は、NLの影響でも説明できず、TLのインプットにもよらないが、世界の他の言語の文法にあると実証され、普遍的な一般化に従うL2の規則性を集めて分析するという現在の研究の流れを踏襲することである。2つ目は、英語以外のTLを用いているL2習得研究である。そして、3つ目として、L2の舞台でまだあまり広く研究されていない構文の習得に関する研究を挙げている。

本研究は、日本語と韓国語の格に着目し、類型論的有標性の代わりに「多次元的な相関としての有標性」を用いてL2の学習者の学習困難度に関する検討を行うものである。これはEckman (2011) が挙げている3つの領域に貢献することが期待できる研究であるといえる。

今後は、4節で論じた格の有標性の概念をより精密にし、有標性に基づく学習困難度についての仮説であるMDH (及びSCH) が実際に日本語と韓国語の格の学習困難度を正確に予測しているかどうか検証する。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、終始懇切丁寧なご指導をいただきました上田雅信先生に心から感謝致します。また、査読を担当して下さった匿名の2名の先生方から大変有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝致します。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

## 参考文献

- Blake, B. J. (2001). *Case (Cambridge Textbooks in Linguistics)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Callies, M. (2013) "Markedness." In P. Robinson (ed.), *Routledge Encyclopedia of Second Language Acquisition*. New York: Routledge, 406-409.
- Croft, W. (2003) *Typology and Universals*. 2<sup>nd</sup> edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eckman, F. (1977) "Markedness and the Contrastive Analysis Hypothesis." *Language Learning*, 27, 315-330.
- Eckman, F. (1991) "The Structural Conformity Hypothesis and the Acquisition of Consonant Clusters in the Interlanguage of ESL Learners." *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 23-41.



- Eckman, F. (2004) "Universals, Innateness and Explanation in Second Language Acquisition." *Studies in Language*, 28, 682-703.
- Eckman, F. (2008) "Typological Markedness and Second Language Phonology." In J. G. Hansen Edwards and M. L. Zampini (eds.), *Phonology and Second Language Acquisition*, Amsterdam: Benjamins, 95-115.
- Eckman, F. (2011) "Linguistic Typology and Second Language Acquisition." In Jae Jung Song (ed.), *The Oxford Handbook of Linguistic Typology*. New York: Oxford University Press, 618-633.
- Eckman, F. (2013) "Markedness Differential Hypothesis (MDH)." In P. Robinson (ed.), *Routledge Encyclopedia of Second Language Acquisition*. New York: Routledge, 409-411.
- Ellis, R. (2008) *The Study of Second Language Acquisition*, 2<sup>nd</sup> edition. Oxford: Oxford University Press.
- Gundel, J., K. Houlihan and G. Sanders (1986) "Markedness Distribution in Phonology and Syntax." In F. Eckman, E. Moravcsik and J. Wirth (eds.), *Markedness*. New York: Plenum Press, 107-138.
- Han, Z-H. and E. Tarone (2014) "Introduction." In Z-H. Han and E. Tarone (eds.), *Interlanguage Forty Years Later*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 1-6.
- Haspelmath, M. (2006) "Against Markedness (and What to Replace it With)." *Journal of Linguistics*, 42, 25-70.
- Haspelmath, M. (2009) "Terminology of Case." In A. Malchukov and A. Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of Case*. New York: Oxford University Press, 505-517.
- Kellerman, E. (1979) "Transfer and Non-transfer: Where We Are Now." *Studies in Second Language Acquisition*, 2, 37-57.
- Kellerman, E. (1983) "Now You See It, Now You Don't." In S. M. Grass & L. Selinker (eds.), *Language transfer in language learning*. Rowley, MA: Newbury House, 112-134.
- Lado, R. (1957) *Linguistics Across Cultures: Applied Linguistics for Language Teachers*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Malchukov, A. and A. Spencer (2009) "Typology of Case Systems: Parameters of Variation." In A. Malchukov and A. Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of Case*. New York: Oxford University Press, 651-667.
- Moulton, W. (1962) *The Sounds of English and German*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer: Cross-linguistic Influence in Language Learning*. [丹下省吾 訳 (1995) 『言語転移：言語学習における通言語の影響』東京：リーベル出版.]
- Odlin, T. (2013) "Contrastive Analysis Hypothesis (CAH)." In P. Robinson (ed.) *Routledge Encyclopedia of Second Language Acquisition*. New York: Routledge, 129-131.
- 朴在權 (1997) 『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』東京：勉誠社。
- 榮谷温子 (1997) 「第二言語獲得・習得に関わる有標性理論—その歴史と問題点—」, 『地域文化研究』1号, 45-64.
- Sadakane, K. and M. Koizumi (1995) "On the Nature of the 'Dative' Particle *ni* in Japanese." *Linguistics*, 33, 5-33.
- Sanders, G. (1974) "Introduction." In D. Cohen (ed.) *Explaining Linguistic Phenomena*. New York: John Wiley & Sons, 3-20.
- Selinker, L. (1972) "Interlanguage." *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10, 209-231.
- Sohn, Ho-Min (1999) *The Korean Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wardhaugh, R. (1970) 'The Contrastive Analysis Hypothesis.' *TESOL Quarterly*, 4, 123-130.

(平成26年10月17日受理、平成26年12月26日採択)